

ホモナショナリズムとホモノーマティビティに 基づく日本の右派 LGBT 当事者の言説分析— 欧米との比較を通じた社会文化的背景の考察

MA Wenke

本論文は、日本の右派 LGBT 当事者を対象に、そのホモナショナリズムおよびホモノーマティビティ的な特徴を解明することを目的とし、これを支える社会的・文化的要因を分析する。日本社会において LGBT の概念が広まり、2010 年代に入ってから東京レインボープライドや同性パートナーシップ制度の導入をはじめ、LGBT 権利運動が急速に進展した。しかし、リベラルな LGBT 権利運動に反発する保守的な LGBT 当事者が顕在化しつつある(岡田 2019a)。このような状況において、本研究は右派 LGBT の特徴を明らかにし、その言説を検討する。

欧米における右派 LGBT 研究では、自国のセクシャルマイノリティを守るため、ムスリム移民を排除することといった特徴が指摘され、その背後にはホモナショナリズムおよびホモノーマティビティが重要な理論的枠組みとして存在している。ホモナショナリズムは、LGBT の権利やアイデンティティがナショナリズムと結びついて表現される現象であり、ホモノーマティビティは、社会的な承認を得るために求められる規範的な LGBT アイデンティティを指す(Puar 2007, 2013; Duggan 2003)。これらの理論が右派 LGBT の言説を理解するうえで鍵となるが、日本の右派 LGBT 当事者の特徴は、欧米の事例とは異なり、独自の展開を見せている。

本研究では、元参議院議員で右派ゲイ男性である松浦大悟の著書『LGBT の不都合な真実』と、X(旧 Twitter)上で活動する右派 LGBT 当事者 30 名の投稿を分析対象として、右派 LGBT の言説を徹底的に検討した。その結果、日本の右派 LGBT は、欧米におけるホモナショナリズムやホモノーマティビティの特徴を一部共有するものの、独自の文化的アイデンティティに基づいた発展が見られた。まず、右派 LGBT は「日本は寛容な国」というレトリックを積極的に利用しており、日本文化がセクシャルマイノリティに対して特有の寛容性を持つと主張している。この主張は、日本社会における歴史的な寛容性の根拠として、中世以来の性別文化におけるセクシャルマイノリティへの寛容な態度を挙げることが多い。この結果、同性婚の法制化については消極的な態度をとり、

その必要性を否定する論調が見られる。

次に、リベラル派 LGBT 運動やその活動家に対する強い批判も特徴的である。右派 LGBT はリベラル派の急進的な運動が社会秩序を破壊すると捉え、日本のセクシュアルマイノリティ運動の不連続性や、外来的な「LGBT」という概念への反発と結びつけている。このような批判は、彼ら自身の立場を正当化し、日本のナショナリズムと保守的意識に基づくアイデンティティを再構築する一環と考えられる。

さらに、トランスジェンダー女性に対する排除的な態度や、性別二元論の維持を強調する姿勢も顕著である。右派 LGBT における性別に対する厳格な二元論的理解は、ホモノーマティビティの一形態として機能しており、日本社会における保守的な性別観と結びついている。

特に興味深いのは、欧米の右派 LGBT と日本の右派 LGBT のホモナショナリズム言説の違いである。欧米の右派 LGBT はムスリム移民や宗教的価値観を「外集団」として批判する傾向が強いのに対し、日本の右派 LGBT は「LGBT」という概念そのものを「外来の概念」として批判している。この違いは、日本特有の文化や歴史的背景に深く根ざしており、日本の右派 LGBT の立場形成に大きく寄与している。たとえば、彼らの中には「LGBT」という言葉を外来的なものとみなし、自らを「ホモ」や「オカマ」と呼ぶことで、自分たちのアイデンティティを日本文化の文脈の中で再定義しようとする動きが見られる。このような自己認識は、欧米中心の「LGBT」という枠組みに依存しない独自の立場を主張する一環と捉えられる。

本研究は、ホモナショナリズムおよびホモノーマティビティの理論を日本の文脈に適用することで、右派 LGBT がどのようにこれらの理論を反映しつつ、日本特有の社会的・文化的背景を基盤とした独自の言説を展開しているかを明らかにした。また、右派 LGBT の言説がリベラル派 LGBT 運動との対立や日本社会における保守的価値観とどのように交錯しているかを示した。

今後の課題としては、より多様なデータの収集や定量的分析を通じて、右派 LGBT の言説が日本社会全体の LGBT 権利運動や政策形成に与える影響を包括的に研究する必要があることが示唆される。